



東京部会(第71回)

日時:	2014年12月04日(木) 19:00-21:30
場所:	日本大学経済学部2号館2階会議室
参加者:	[順不同] 篠原総一(同志社大学経済学部)、加藤一誠(日本大学経済学部)、中川雅之(日本大学経済学部)、小巻泰之(日本大学経済学部)、梶ヶ谷譲(神奈川県立海老名高等学校)、石山晴美(東京証券取引所)、榊原宏司(東京証券取引所)、大川明弘(川口市立仲町中学校)、大倉泰裕(千葉県立松戸向陽高等学校)、新井明(都立小石川中等教育学校)、塙枝里子(東京都立府中東高等学校)、升野伸子(筑波大学附属中学校)、鍋島史一(教育実践研究オフィスF)、中沖栄(清水書院)、以上14名。

【内容要旨】

- (1) 最初に、来年1月予定の「冬の経済教室」の進捗状況の報告があった。日本証券グループ(東京証券取引所)との共催が決定したこと、日程は1月31日、会場は椋山女学園大学、テーマは企業の教え方である。名古屋部会の立ち上げなども視野に入れた会となることを踏まえ、アナウンス方法などの確認が行われた。
- (2) 来年2月実施予定の「経済教育ワークショップ川口」の進捗状況の報告が大川先生(仲町中学校)からあった。2月15日実施予定で、昨年大雪で中止になった内容のリターンマッチとなるものとのこと。
- (3) 来年3月実施予定の「年次大会」の取り組みの報告が中川先生からあった。法教育と経済教育の対話の4回目として、「年金制度をどう考え、どう教えるか」のテーマで、経済学関係と法学関係の出席者との交渉を行っているとのことであった。また、現場からの発言者に関しても至急候補を探すことが確認された。
- (4) 来夏の「経済教室」の準備状況の報告が石山さん(東京証券取引所)からあった。日程、会場の最終確定を踏まえて内容の確定、講師の依頼などをする予定とのことである。
- (5) 篠原代表から、各部会の報告、教材作成の状況などの報告があった。大阪部会関係では、山本雅康先生の「マンションの耐震化工事シミュレーション」のグループワークの資料や生徒の反応をまとめた資料、李洪俊先生のテスト問題、奥田修一郎先生の指導と評価の一体化を踏まえた、「テスト問題と単元構成」の資料が配布され当日の様子などが報告された。特に、奥田先生のレポートは高校入試問題を整理、分析した貴重なもので大阪部会でも活発に検討されたとのことであった。
教材作成関係では、地理と経済を融合した教材が、インド、ブラジルに次いで、アセアン、アフリカ、カナダ、ロシアと作成中であることが報告された。
- (6) 実践報告関係では、塙先生(都立府中東高校)の「アリとキリギリス」の授業案の改定版が検討された。7月に割引現在価値観点から授業実践をしたものの改訂版で、今回は、の機会費用と不確実性という2つの概念を押さえながら多面的な見方や金融や貯蓄の意味を生徒に理解させようとする授業案である。討議では、金融を教えたのであれば機会費用と不確実性を分けて、後者だけで授業を再編した方がよいのではという意見が出た。そして、異時点間の代替関係を示す無差別曲線を軸にするという整理案も出され、再検討することになった。
- (7) 11月の部会で提案されたテスト問題の検討が行われた。今回は、大倉先生(千葉県立松戸向陽高)と新井



(都立小石川中等)の2人の考查問題が資料として提示された。大倉先生のは高校3年生の「現代社会」の一学期末の考查問題で、一見通常の穴埋めの選択問題や記述問題であるが、問題文は自作で生徒がはじめて見るものを作成していること、選択問題も考えなければ埋められないように工夫しているとの報告があった。新井のものは中高一貫校の中学生三年生公民の考查問題で、教科書の穴埋め、サブテキスト(英文)に関する問題、4択問題、説明問題などから構成され、一般化はできないものとの注釈が加えられた。その後、討議が行われ、これからも継続して検討を行うことが確認された。また、篠原代表からはこれをどうまとめて、発信してゆくのが課題だろうという提起がされた。

(8)最後に、前回の部会で篠原代表から提起された「経済教育のそもそも論」の自由討議行われた。以下はその時の発言の要旨である。

- ネットワークの活動によって経済教育が改善された部分もあるが、やたらに細かい知識が教科書に入って来たり、現在の時点で何を教えるのか改めて考える必要がある。(篠原)
- 原理が分からないと教えるほうも丸暗記の強要になってしまう。難しいことを教える必要はなく、心から納得できるものを教える。それ伝えたい。(中川)
- かつては素晴らしいと思っていた受験の政経は今つまらない。本当に必要な原理的なものを教えることが大事。(梶ヶ谷)
- 出張授業でいろいろな学校に行くが、大変な学校でも生徒は意外にお金や経済に関して理解してくれる。卒業して振り返ってのこるものを伝えたい。(石山)
- 地理・世界史の接合など関わり接合と言う言葉がキーワード。関わりのあるものを理解させることが大事だと思う。(鍋島)
- 大学生に教えているが企業は悪者というイメージをもっている者が多い。その認識を変えてゆきたい。(榊原)
- 物事を考えるためのツールを教えたい。それは中学生でも可能。(升野)
- 社会参画、政策を考えられる人を作りたい。経済はその素材にみちている。(埴)
- 仕組み、社会参画、政策選択ができる人間を育成するための教科書を作るように努力している。(中沖)
- 専門外の日本史を教えて感じるが、不要な知識が多過ぎる。経済でも贅肉をそぎおとし大切などころをしっかりと教えたい。(大倉)
- 経済学だけでなく、大学は教育の受け皿になっていない。それを打ち破ってゆきたい。(小巻)

など様々な発言があった。これを受けて、篠原代表から、経済は身近だが難しいというが、本当は経済は見えないものだ。その見えないものをしっかりと教えるためには、細かい知識の氾濫に歯止めをかけ、骨組みとなるようなスタンダードが必要になるだろう。その内容をもう少し検討してゆきたい、とのまとめがあり、今後の課題とすることとなった。

以上 記録と文責 新井

なお、次回は1月22日(木)19:00~21:00。場所は日本大学経済学部。内容は、年次総会の検討、実践報告、テスト問題の検討、経済教育のありかたなど。